

キャラクター名 亀谷 竜希 (かめや たつき)	プレイヤー名
----------------------------	--------

シンドローム	モルフェウス ノイマン		ワークス	レネゲイドビーイングA	カヴァー	考古学者
	オプショナル		年齢	26	性別	男
覚醒	償い	衝動	殺戮	初期侵食率	41	%
出自	使命	経験	喪失	邂逅	友人	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	33
肉体	1	1	3			5	行動値	7
感覚	2	0	0			2	(非装備時)	7
精神	3	0	0			3	戦闘移動	12
社会	2	0	0			2	全力移動	24

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	1		射撃	1		RC			交渉		
回避	1		知覚			意志	1		調達		
運転：二輪	5		芸術：			知識：			情報：UGN	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
キングス・キャンビット<戦術：2>xファンアウト：2>		0				対象のメジャー判定ダイスを+2個。自身は対象にできない。即座に対象の戦闘移動。侵蝕値10
ジオック・ピアノ<戦術：2>		0				対象のメジャー判定ダイスを+2個。自身は対象にできない。侵蝕値6
	運転	7r+6		8		他の情報(モーフイングバウ 戦術B 全が解読250ml)、クリティカル値を3、運命判定ダイスに+2個、判定の達成値に+1、説話値
	運転	11r+7		8		

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品		合計装甲：	0	合計回避：	0
ロイス					
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイム	消費	
同志	P 友情	N 劣等感			
恋人(深山鈴)	P 幸福感	N 隔意			
相波武	P 親近感	N 劣等感			
ヴェアヴォルフ(シナリオ)	P 執着	N 憎悪			
	P	N			
	P	N			
	P	N			
最大財産P:	4	残り財産P:			

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
ヒューマンズネイバー	1	-	常時	至近	自身	自動	RB	
効果：衝動判定のダイス+LV個								
オリジン：ヒューマン	1	2	マイナー	至近	自身	自動	RB	
効果：シーンの間あらゆる判定の達成値を+LV								
コンセントレイト	2	2	メジャー	-	-	-		
効果：クリティカル値-LV								
戦術	3	6	セットアップ	視界	シーン(選択)	自動		
効果：ラウンド中に行うメジャーのアクションダイスを+LV個								
ヴィーグルモーフィング	1	2	マイナー	至近	自身	自動		
効果：任意のヴィーグルを作成。								
エースドライバー	2	2	メジャー/リアクション	-	-	-		
効果：ダイス増加+LV個								
ファンアウト	2	4	セットアップ	至近	範囲(選択)	自動		
効果：対象は即座に戦闘移動を行う。シーン内でLV回								
	★							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

成長：5点戦術
 UGNに所属する遺産の研究者。時折人手が足りないせいで実働部隊に回されるので困っている。本人自身ははっきりと覚えていなかったが、人類の守護を目的として生まれたRB。
 ※使命を思い出したのはレネゲイドビーイングの発生が確認されたところである。
 元からRBだったのか、浸食されてRBになったのかまでは検討しておりません。
 うしろの正面だあれネタだよ(000)

比較的温度なタイプであるが、素がでると乱暴な口調になることがある。
 実は元ヤンキーなので相波は後輩(?)
 ※とりあえず、技名とコードネームはチェス用語より。 オルクスの方がポイントだけど気にしない(-"-)
 恋人助けられずに死なせてるので、人の死には敏感。研究室に籠るなど裏方に居たがっている。

『君にプレゼントをあげよう』
 突然の電話だった。聞き覚えのない男の声。いたすら電話と無視をして、喫茶店で待ちくたびれているであろう彼女の元へと亀谷は向かった。

絹を裂くような悲鳴、逃げ惑う人。突如現れた異形の怪物は次々と人を屠る。
 彼女と共に逃げようとするも、襲いかかる攻撃を避けることが出来なかった。
 痛みは感じない。それは彼女が亀谷をかばったからだだった。
 「逃げて…」
 血の海に倒れ込む彼女の姿。嘲笑う怪物。鳴り響く電話。
 そこで記憶は途切れている。